

講演会報告

時空の旅、二つ

今井 勉

(1) 作家ルネ・ドゥペストル氏講演会

2004年5月31日、東北大学大学院文学研究科にて、作家ルネ・ドゥペストル René DEPESTRE 氏による講演会「トゥッサン・ルーヴェルチュールからエメ・セゼールまで *De Toussaint Louverture à Aimé Césaire*」が開催された。コメンテーターに、今回、氏を招聘された一橋大学大学院の恒川邦夫教授をお迎えし、導入としてドゥペストル氏の業績をご紹介いただいた。ドゥペストル氏は1926年ハイチ生まれの詩人・小説家・評論家。キューバに長く滞在した後、1978年以降フランスに在住。1988年に小説 *Hadriana dans tous mes rêves* でルノードー賞、1993年に詩集 *Anthologie personnelle* でアポリネール賞を受賞。詩・小説を発表する傍ら、ネグリチュードや現代のクレオール性をテーマに活発な評論活動を行っている。今回の講演では、ハイチ革命の立役者ルーヴェルチュールからネグリチュードの旗手セゼールに至る脱植民地主義の歴史をめぐって、氏自身のセゼールとの交流なども交えて、興味深いお話を聞くことができた。講演前半ではルーヴェルチュール(1743-1803)の業績がフランス革命の展開と絡めて紹介された。サン＝ドマング(ハイチの旧名)のサトウキビプランテーションの奴隷の家に生まれたルーヴェルチュールがフランス語の読み書きを覚え、読書によって知的形成を遂げた後、1791年以降、逃亡奴隷を組織し、フランス革命による本土の政治的社会的な大変動と植民地問題論争を背景に、史上初の黒人革命を準備していく歴史のダイナミズム、とりわけ、1801年、黒人総督として独自に起草した「ルーヴェルチュール憲法」の歴史的意義が浮き彫りにされた。その第一条で、サン＝ドマングは植民地領土としてフランス帝国に帰属するが、しかし、独自の法律に従うと謳った思想がナポレオンの忌避するところとなり、結局、ルーヴェルチュールは謀略によって捕縛され獄死するに至るが、この憲法草案に見られる、人種を超えて普遍的な自由平等の人権思想は、政治思想としてだけでなく人類の文明史を考える上で極めて重要な価値を持つことが強調された。続く後半では、20世紀の脱植民地主義運動の中でルーヴェルチュールを再評価した1913年生まれのマルチニックの詩人エメ・セゼールへと視点に移される。伝記的紹介に絡めて、1967年にドゥペストル氏自身がセゼールと対話した折の体験も紹介された。いわゆるネグリチュード運動の中心人物としてイデオロギー的側面に評価の重点が置かれがちなセゼール像に対して、ドゥペストル氏は、「しかし、優れた詩人エメ・セゼールの叙情は、彼の思想の中心にあるネグリチュードをも含んだ、理論やイデオロギーの単調な枠組を、大きく超えるものであり、世界史の聖火にも比べられるものとして残っている」として、セゼール詩における詩的真実の祝祭を高く評価する。最後に、ルーヴェルチュール没後200年記念の2003年春にこの歴史的人物が獄死したジュラ山中の要塞跡を訪問した折、突如、セゼールの詩『帰郷ノート』中の、悲痛なルーヴェルチュール讃歌の一節が思い出され、思わず涙したというエピソードが紹介され、国際的な市民社会における人間の連帯への希望に触れて、話が閉じられた。日本から遥か遠いカリブ海の18世紀と20世紀の大人物二人を

現代の文脈の中で再評価するドゥペストル氏のお話は、現代史の生き証人とも言える氏自身の言葉の迫力と共に私たち聴衆にとって感銘深い時空の旅となった。

(2) グルノーブル第2大学名誉教授レジヌ・ピエトラ氏講演会

2004年11月24日、東北大学大学院文学研究科にて、グルノーブル第2大学名誉教授レジヌ・ピエトラ Régine PIETRA 氏による講演会「ヴァレリーと道元、あるいは現在の揺らめき *Valéry, Dôgen, ou la vibration du présent*」が開催された。ピエトラ氏は、ご専門である美学・哲学の立場からヴァレリー研究の第一線に立ってこられた方である。数多い論文業績の中でも、国家博士論文『ヴァレリー、空間の方向と言語の道筋 *Valéry directions spaciales et parcours verbal*』（1981年 Minard 刊）は、世界のヴァレリー研究において基礎文献となっている。今回の講演は、20世紀西洋の詩人思想家ヴァレリーと13世紀東洋の禅の思想家道元を、時間論を中心に、両者の根本的な類似性を浮き彫りにするという大胆な試みであった。ピエトラ氏は、一見突飛に見えるこの比較を氏自身の「中心外し」あるいは「別の仕方考える」契機と捉え、厳密な推論手続きによって極めて濃密な論を展開された。二人の比較を軸としつつ、インド哲学、仏教思想、古代ギリシャ哲学から、ショーペンハウエル、フッサール、ハイデガー、バシュラールといった近現代の哲学者まで、眩暈のように繰り出される該博な知識とダイナミックな論理展開によって、内容の難解さにもかかわらず、聴衆を魅了する講演会となった。終了後、仏文研究室で行われた懇親会の場でも、参加者との熱を帯びた対話は続き、氏の気さくなお人柄もあり、「知を愛する」率直な議論が飛び交ったのは、実に爽快な光景であった。講演内容を簡単に報告しておきたい。母の葬儀の折、たなびく香の煙に無常を悟ったという道元の逸話と、詩人モレアスの葬儀の折、茶毘の煙を眺めた経験の反映した『若きパルク』の燃えて立ち上る香の煙の一節との比較から始まった論は、ヴァレリーと道元に共通して見られる、二元論的カテゴリー対立の拒否へと進んでいく。存在と非存在、身体と精神、善と悪、こうした二分法の拒否が的確な例証と共に明らかにされる。たとえば、「人間の《身体》が根本的な役割を演じていないようないかなる哲学体系も、不活性であり不適格である」とするヴァレリーと、「人が道に到達するのはまさしく身体を通してである」とする道元との相同性が示される。そして、両者の類似性を最もよく示す時間概念の比較へと考察は進む。時間は両者において持続ではなく存在そのものである。ピエトラ氏は「時間という普遍的な連続体は存在しない」としたヴァレリーと、『正法眼蔵』有時（うじ）の章で「いはゆる山をのぼり河をわたりし時に、われありき。われに時あるべし」「時もし去来の相にあらずば、上山の時は有時の而今なり」と喝破した道元に共通する、根本的な「現在主義」を浮き彫りにする。その上で「まさに今」を意味する「而今（にこん）」から、さらに「刹那（クシャナ）」に関する考察を加えて、最後に、道元の禅の思想の現代的な意義が語られた。古今東西を縦横に駆け巡るピエトラ先生の知的時空の旅を、ともかくも身体的に体験した稀有なひと時であった、と思う（その眩暈の感覚から今もまだ抜け切れていないと感じるのは私だけであろうか）。

（東北大学大学院文学研究科助教授）